

大飢饉の犠牲者

—— カナダに渡ったアイルランド人の子供たち ——

佐藤 郁*

はじめに

1840年代半ばにアイルランドを襲ったジャガイモの不作による大飢饉は、大量の死者と大量の移民を生み出した。1845年から5年間、断続的にジャガイモに病害が発生し、わずかな収穫物も軍隊の護衛つきで領主国の英国に運ばれるようになった。アイルランドに人にとってジャガイモは主産物であると同時に主食でもあったため、小作人らは借地料を支払うには自分たちの食べる分を売るしかなく、飢えや伝染病がアイルランド全島を覆った。英国政府の援助、対策は緩慢で、アイルランドに残っていても死を待つしかない人々は、万に一つの希望に賭けて、「棺桶船」と呼ばれたポロポロの移民船に乗り込んだ。借地料が払えず、土地を追われ、地主がチャーターした船に乗せられた者もいた。そういった船の多くで死者が出た。乗船前から伝染病の種を身体に抱えていた者も多かったが、そうでなくとも栄養失調の者が多く、不潔で食糧も薬も不十分な船の上では、いったん病気が発症するとそれが拡がるのを止める手立てがなかったのである。

アイルランド移民の最大の受け入れ先であったアメリカは独立国家となり、こうした移民の抑止の方向に動いていたが、依然英国の領地であったカナダはほとんど無条件に受け入れざるを得なかった。入国した移民の多くはその後アメリカを目指していたにもかかわらずである。「暗黒の47年」と呼ばれる1847年のアイルランドからの大量移民は、カナダに大混乱をもたらした。最大の受け入れ口だったのがケベックであった。その防波堤としてケベック近くのグローセ島が移民の手続き所となったのは1832年のことだった。当時、移民がもたらした伝染病によって多くのケベック市民が命を落としたからである。(グローセ島の当時の混乱については、拙著『暗黒の1847年—カナダにおけるアイルランド移民受け入れ』を参照いただきたい。)

このようにして、アイルランドにとっての「暗黒の47年」はカナダにとってもまた暗黒の年となったのであるが、その暗黒の中でもっとも苦しく悲惨な思いをさせられたのは誰か、ということを書者は考えてみた。その結果、自力で生きていくことのできない弱者、すなわち高齢者や子供たちこそが、この大飢饉の最大の被害者であったのではないかと思いついた。そこで本稿では、1847年当時のアイルランド移民の子供たちの状況がどのようなものであったについて検証してみたい。

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

1. 孤児を生み出す移民船

何が孤児を生み出したか——大飢饉によって、アイルランド国内でどれほどの子供が孤児となったのか、それは定かではない。もちろん、1845年に始まったジャガイモ飢饉によって、1849年までに飢えや病気により約100万人の死者が出ていたことを考えると、両親とも失った子供も少なくなかったろうが、その数はわかっていない。アイルランド国内にいる限りは、親戚や同胞の下に身を寄せることができたのではないかと安易に考えてしまいがちだが、実際にはそのような余裕もなかったようである。ごくわずかな富裕層をのぞき、ほとんどのアイルランド人は、プロテスタント教徒も含め、誰も皆同様の困窮状況にあったが、わが子の命を優先するのは洋の東西を問わないようで、極貧の生活の中で子供の船賃を工面し、子供だけを先に送り出した親が数多くあった。すでにカナダやアメリカに移住していた親類などをたよりに、他の大人に子供を託し、移民船に乗せたのである。ある資料によると、大人一人で50人もの子供をつれてきたケースもあったという。⁽¹⁾

さらなる悲劇は、カナダへ渡る移民船が作り出した。独立国家となっていたアメリカは、アメリカ国民にとって危険なアイルランド移民に対し門戸を閉じ始めていた。1846年から、アメリカへの船賃や人頭税を値上げし、極貧のアイルランド人はカナダへ向かうことになった。カナダからアメリカへの移動は簡単だったため、船賃を節約し、ひとまずカナダに渡ろうという移民も少なくなかった。このことから考えても、アメリカへ向かう船よりもカナダへ向かう船のほうが、いっそう船内の居住環境が悪かったことが容易に想像できるというものである。カナダへの船はもともと、カナダから木材を運んできた船で、復路は船倉に2段ベッドのようなものをしつらえて、移民を乗せた。当時大西洋の船旅は40～50日ほどを要した。船倉には窓も便所もなく、乗客はいわゆるおまる代わりの樽に用を足した。しかし、ベッドの一段に3～4人一緒に寝るような状態で、おまるの数も足りず、船内の隅で直接排尿してしまうこともあった。ベッドには布団がわりに藁が敷かれたが、通気の悪い不潔な船内で、藁はじきに腐敗臭を放つ。人々の汗、排泄物、藁の腐敗臭で、船内には鼻をつく異臭がたちこめていたという。また、移民は食料の持参を勧められていたが、貧しい彼らにとってそれは難しいことであった。母親たちはわずかな食料や水を子供に優先して与え、その結果、自分が病に倒れて命を落とすという悲しい状況が生まれた。

ケベックの移民局が残した記録によると、1847年にケベックを目指してイングランドおよびアイルランドを船出した移民のうち、14歳以下の子供は約3万1千人。うち、船上およびグローセ島で約4千人もの子供が命を落としている。⁽²⁾ 大人の約8%と比べ、約13%という高い確率で子供たちはケベックに到達することなく短い生涯を終えたということになる。「棺桶船」の上では、当時治療法がまだわかっていなかったチフス、そして「船の熱」と呼ばれた原因不明の熱病がしばしば発症し、多くの移民が命を落としたのである。体力のない高齢者や子供にとっては危険極まりない長い船旅であったが、それを承知で乗せざるを得なかったことは家族にとっても断腸の思い出あつたろう。

一方、船上およびグローセ島で誕生した赤ん坊は172名であった。臨月の危険な身で棺桶船に命を

預けざるを得なかった妊婦がこれだけいたということを考えると、当時のアイルランドがどのような状況であったか、想像を絶するものである。

2. カナダに渡ったアイルランド移民の子供たち

絶えず本国の顔色を伺わなければならなかったカナダ政府の対策が遅れがちであったのに対し、教会関係者の果たした役割は非常に大きい。ケベック司教区のカゾ神父とシグネイ大司教は頻繁に手紙をやりとりし、移民たちの世話にあたった。

そのほか、行政をあてにせず人道的博愛の精神から孤児らの救済に奔走した組織のひとつに、Charitable Ladies of Quebecがあった。この団体は、カトリック、プロテスタント、イギリス系、フランス系など宗派や出自を超えた女性たちの集まりで、子供らの世話をするために1830年代に設立された組織だった。1849年には Grey Nuns of Montreal が引継ぎ、1847年から翌年にかけての約600人の子供の記録を残している。

1847年、Charitable Ladies of Quebec が子供らを引き取り始める前は、聖職者らの世話で子供らは一般家庭に引き取られた。ケベック市内の St. Patrick's Church の中庭には仮設の建物が建てられ、市民が直接そこへやってきて子供らを引き取っていった。そのため、のちに援助を求めて同教会が政府に提出したリストには、名前を掲載できなかった子供らも多くあった。この教会は郊外にも家を借り、隔離する必要がある子供らをそこに収容した。7月16日付けの Le Canadien 誌が、孤児を引き取った女性がチフスに感染して死亡したと報じて以後、同様の事例がモントリオールでも報じられ、一般市民は、孤児の引き取りに消極的になった。⁽³⁾ このため、孤児をあっせんする教会側も、孤児の健康を確かなものにする必要に迫られた。郊外の施設はその点で大変効果的であった。

次に、Charitable Ladies of Quebec が残していた1847年および翌年の受け入れ児童についての記録を参照してみたい。⁽⁴⁾ ここには20歳までの619名の子供たちの名前が記されている。孤児院に入所した日づけ、氏名、年齢、両親の名、出身地と教区、船名および引き取り先が記録されている。619名のうち実に104名もが死亡している。親、きょうだい、おじなどの血縁に引き取られていったのはわずか60人。そのほかは、個人に引き取られたり、別の施設へ移されたりした例が多いが、中には disappeared (失踪) と記されている者、「？」と記されている者がある。記録といってもそれぞれわずか1~2行の記録でしかない。2年間で600名以上もの子供が出たり入ったりしたこの孤児院の混乱ぶりが伺えよう。

1847年、カナダに着いた孤児たちの当時の状態、状況について述べている資料は、決して多くない。グローセ島は連日の死者で混乱していたし、アイルランド人というだけで名前もわからない乳幼児の孤児もいた。ここでは、マリアナ・オガラガー著の論文“The Orphans of Grosse Ile: Canada and the adoption of Irish Famine Orphans” とマリアナ・オガラガーおよびローズ・メゾン・ドンピエール共著の *Eyewitness – Grosse Isle 1847*⁽⁵⁾ の中に現れる “orphan” や “children” についての記述をいくつか拾い上げることにする。(以下、“The Orphans” および *Eyewitness* とする。)

5月15日 グローセ島での初めての死者は Ellen Kane というメイヨー州出身の4歳の少女だった。マクガラン神父が鎮魂の儀式を行ったが、同神父はまさにその同じ日にモナハン州出身のウッズ夫妻の息子オーエンに洗礼を施すという喜びの儀式も執り行った。(cf. “The Orphans,” p.85)

5月19日 5月5日に大西洋上で生まれた赤ん坊に同神父が洗礼を施した。(同上)

冬季はセント・ローレンス川が凍結するため、移民の受け入れは毎年5月から11月ころにかけて行われていた。1847年、グローセ島に入港した初めての移民船は、5月14日入港のリバプール発のシリア号だった。242名の乗客がいたが、うち9名は洋上で、40名がグローセ島で死亡した。

5月24日 マクガラン神父が、すでに多くの孤児がいることをシグネイ大司教への手紙の中で報告。(cf. *Eyewitness*, p.51)

5月29日 カゾ神父が、元々貧しいアイルランド系の人々のために蓄えていた基金を、孤児の救済のために使いたいという手紙を関係者に回覧。(cf. “The Orphans,” p.58)

6月3日 「孤児の数は大変なもので、悲しいことに私たちには、他の母親にその子たちを託して、食べ物を買ってやってほしいと金を渡すことしかできません。しかし彼らの多くもいざれ他の人たちと同じように死ぬのです。この島で彼らを待ち受けている不幸をまだ知らずにいるのは幸いなことです。私は息をひきとって間もない母親の手をもてあそぶ子供を見ました。」(タチェリユー宣教師の手紙、*Eyewitness*, p.85)

6月9日 シグネイ大司教は、混乱のさなかで、支援の必要な家庭や孤児の数を確認することもできないと、回覧の手紙の中で報告。(cf. *Eyewitness*, p.88)

7月24日 シグネイ大司教はモントリオールの総督への手紙の中で、これまでに100人以上の孤児が一般家庭に引き取られているが、子供たちがそういった家庭へ病気を持ち込むことが心配であると述べている。また、当初は子供の引き取りに熱意を見せていた教区民たちも消極的になり、孤児の支援にさらなる資金が必要であると訴えている。(cf. *Eyewitness*, p.166)

教会は早くから、教区民に対し孤児の引き取りを要請し、教会関係者らは孤児らを連れて島とケベックの間を頻繁に往復した。カトリック、プロテスタント双方の教会が、移民の救済活動にあたった。ケベックは木材や毛皮を扱う交易都市として栄えてきた場所で、古くから人の往来が多く、親に捨てられる子供もおり、孤児院が複数存在していた。1847年に孤児らの救済活動の中心となったのがこれらの孤児院と教会だった。孤児院や教会は保護施設であると同時に、待機場所、情報交換の場ともなった。混乱の中で家族とはぐれてしまう子供も多数いたため、そういう子供の行方を捜して親たちが教会に情報を求めて訪れたのである。また、時期は不明であるが、軍でも病院を出たあとの子供たちの居場所をグローセ島内に設け、世話をする保育士が雇われていたこともわかっている。

また、親を失った子供たちのため、ケベックの造船業者のネズビットという男性が自宅を提供するということがあった。この家はすぐに一杯になってしまったというが、このように、教会、孤児院、一般家庭、軍、州政府など、あらゆる方面で孤児の救済に奔走していたことがわかっている。

3. 孤児院の一日

1848年にトロントで刊行された報告書 *Report of the Managing Committee of the Widows and Orphans' Asylum, For the Care and Maintenance of the Destitute Widows and Orphans of the Emigrants of 1847* は、施設での食事や日程、孤児らの行き先などを記録している。⁽⁶⁾ まず、日程を簡単に紹介しよう。

5時に起床後、身づくろい、部屋の清掃、点呼、祈禱、朝食。

8時から10時、リクリエーションまたは作業。

10時から12時30分、学習。

12時半に昼食。その後リクリエーションまたは作業。

14時から18時まで学習と作業。

18時に夕食、点呼、祈禱、就寝準備。

20時30分、消灯。

(冬季<11月から4月末まで>は、起床が6時、就寝が19時半。)

非常に規則正しく、健康的な生活である。作業 (work) の内容は不明であるが、子供らに対しては教育のみならず、気晴らしのためと思われるリクリエーションも行われ、心身の健康を気遣う精神が伺える。次は、食事の内容を紹介する。量は年齢によって細かく定められていた。

日曜：(朝) パンと紅茶、(昼) パンと肉、(夜) パンと紅茶

月・水・土曜：(朝) オート麦の粥と牛乳、(昼) パンとスープ、(夜) パンと紅茶

火・木曜：(朝) オート麦の粥と牛乳、(昼) パンと肉、(夜) パンと紅茶

金曜：(朝) オート麦の粥と牛乳、(昼) パンと牛乳 (病人のみ)、(夜) パンと紅茶

未亡人および11歳以上の子供：パン、肉は一回につき半ポンド (227グラム)。牛乳は一回につき半パイント (約0.29リットル)。朝食のオート麦は7オンス (約198グラム)。スープは1クォート (約0.95リットル)。紅茶は8分の1オンス (約3.5グラム)。砂糖は一食につき1オンス (約28グラム)。

3歳以上10歳以下の子供はその半量。夕食には紅茶のかわりに水と砂糖入りの牛乳。

2歳以下の子供：パンは1日に半ポンド。全乳を1日に1パイント。

現代の食生活と比べると、かなり質素なものといわざるを得ないが、日々の食事に事欠いていたアイルランドでの生活を考えると、一日三回規則正しく提供される食事が、子供たちの育成にどれほど寄与したか、はかり知ることはできない。

また、この施設では室内に規則が貼り出されており、違反をした者には食事内容の変更や施設からの退去などの罰が与えられることになっていた。規則のいくつかは、「作業を怠ったり拒否したりしてはいけない」「病気のふりをしてはいけない」「施設の物に故意に損害を加えてはいけない」といったものであり、共同生活を円滑に行うために当然必要なものであった。

しかし、すべての施設で衣食住が行き届き、秩序が保たれていたわけではないようである。2章の冒頭で述べた施設のように、わずか2年の間に600人も人間が出入りすれば、食料や衣服はいくらあっても足りない状態だったろう。下記の文は修道女がモンリオールのある施設の様子を述べているものである。

子供たちの着衣はぼろになって落ちかけており、引きずって歩くこともほとんどできないほどです。(cf. “The orphans,” p.101)

子供たちのおかれている不潔な状況をお知らせするのにあたって、しらみでいっぱいの子供の頭髪を切ったことをお話いたしましょう。しらみは大量でしかも勢いがあって、切り落とされた髪の毛とともに歩いていきそうなほどでした。(cf. “The orphans,” p.102)

まるで、戦中戦後の日本の子供たちのようである。彼らの親は、死んでしまったか、生きてはいるものの病に伏しているか、生活の基盤を築くまで子供を預けているか、あるいは自分自身生きていくのに必死で子供を捨てざるを得なかったか。いずれにしても、自力では生きていくことのできない弱い存在である子供たちは、アイルランドを襲った大飢饉と英国による冷酷な政策の最大の被害者であったと言えよう。

4. 孤児たちの行く先

前章で紹介したトロントの救護院の報告書には、1847年9月11日から翌年5月末まで、この施設で受け入れた18未満の孤児320人のうち、197名の引き取り先が記録されている。その他は、親戚が迎えにきたり、10代後半の子となると、仕事を見つけて施設を離れる場合もあった。197名のうち110人が農家（兼業を含む）に引き取られている。「引き取る」といっても、完全にその家の子供として引き取られる場合もあれば、月に1ドル、2ドル、年に5ドルなどといったお金を子供に与える場合、労働に応じて賃金を支払うという場合、3年限りなど、条件はさまざまである。農家の場合、農作業の担い手として子供を引き取っている例が多いだろう。そのほかは店主、医師、宿屋、仕立て屋、鍛冶屋など多岐にわたっている。このうち、5件のみ、詳細に挙げてみることにする。

1. John Oliver (5歳)：11月28日、スカボローのマッコネルという農夫に、その家の子供として引き取られる。
2. Michael McKeogh (14歳)：12月3日、キングストリーのデイヴィスという食料雑貨屋に引き取られる。1ヶ月1.5ドル。
3. Margaret Feron (13歳)：11月29日、トロント市内の学校長モウルトン氏に引き取られる。3年間の養育。
4. Winney Harte (17歳)：11月27日、アムハーツバーグのマック神父に引き取られる。能力給。
5. Pat Nugent (12歳)：12月2日、クィーンズ通りの肉屋マーフィー氏に引き取られる。肉屋として年季奉公。

3例目のような期限付きの養育は、子供が成長し、自力で生活の糧を得られるような年齢になるまでの間面倒を見るということである。何年間か養育するうちに実質的に家族の一員となってしまった例は少なくなかったと推測されるが、引取り時に、完全に自分の子供として養子にするという条件が明記されているのは、197件のうちわずか5件にすぎない。人道的な見地から、一時的に子供らの面倒を見ることはそう難しいことではないが、養子縁組をして完全に家族になることは簡単ではない。2例目のようなケースは、賃金というにはあまりにも少ない額であるが、いずれこの少年が独立立ちするときのための資金援助を意味している。しかし、一方で、子供たちの養育にかかる費用(衣服代、暖房代など)を政府に求める家庭も少なくなかった。

カナダへのアイルランド移民というと、この1847年が最も印象的であるが、すでに1800年代初頭から定着を始めており、セント・ローレンス川沿岸にはアイルランド人の村がいくつか存在していたという。多くは農業や製材の仕事に携わっていたが、大飢饉の時代を迎えるまでの約40年の間には、都市部で弁護士、医師、教師、聖職者として活躍するようになっていた者もあった。彼らは大飢饉の際に、真っ先に同胞に援助の手を差し伸べた人々であった。そのような人々は経済的に余裕があったであろうが、多くの移民はまだまだ余裕のない質素な生活をしていた時代である。

マリアナ・オガラガーがケベック州のレオ・タイというフランス語を話す男性から聞き取った話を参照したい。この男性はアイルランド、ロスコモン州出身の祖父ダニエル・タイから繰り返し聞かされたという話をオガラガーにして聞かせたのであった。

1847年、未亡人メアリ・タイは5人の子供とともにダブリンからナオミ号に乗ってカナダに向かった。航海は悪夢のような8週間で、飲み水はわずかしかなく、食事も1日1回だった。船上でチフス患者が出た。12歳のダニエルと9歳のキャサリンはグローセ島で家族と生き別れ、2度と会うことができなかった。8月に二人はある農場につれていかれた。農場のロンボ夫妻はダニエルだけを引き取るつもりだったが、引き裂かれることに絶望して泣き叫ぶ子供らの姿を見て、結局兄妹を一緒に引き取ることにした。養父亡き後ダニエルが農場を継ぎ、その後、その子供リチャード・タイ、孫レオ・タイに引き継がれた。(cf. "The Orphans," pp.90-91)

ここで注目したい点は、引き取られたといっても、名前を変えたわけではないということである。養子のダニエルに農場を継がせたところをみると、コロombo夫妻には子供がなかったのかもしれない。しかし、そうするとコロomboという姓は彼ら限りで終わってしまう。

このように、両親を失い孤児となって、カナダのフランス系の家庭に引き取られた場合、話す言語はフランス語になってしまう。その上さらに、姓を変えれば、アイルランド人というアイデンティティーを確認するのが難しくなってしまう。年齢によるだろうが、幼くしてアイルランドを離れてきた子供らには、アイルランドについての記憶はほとんどないだろう。親の記憶もないか、おぼろげかもしれない。アイルランド人であることを忘れさせたいか、自分たちは本当の両親ではないということを忘れさせたいか、養父母の気持ちひとつというところではないだろうか。

混乱のきわみであった1847年、グローセ島やケベックにはアイルランド人というだけで名前もわからない乳児もいた。こうした子供たちは施設や養父母に与えられた名前で育ったが、成人後に自らの意思で改名することもあったという。また、アイルランドの地名や人名に慣れていない係官や、後に名簿をタイプした者たちのミスによって、正確な名前が多く失われた。キルケニーの地名“The Rower”は“Deroar”と綴られ、別のところでは“Kowes”と綴られた。BrigidはBridgetやBrigideと、EdwardはEdowardと、KerryはCaree、TyroneはDroneとなった。このような例は枚挙に暇がない。

それでもアイルランド移民の子供の多くは、移民1世・2世であった親や祖父母らから、おとぎ話のように故郷アイルランドのこと、移民の苦労のことなどを繰り返し聞かされて育ったに違いない。また、養父母から、1847年の混乱や惨状を、子供を引き取った喜びを聞かされて育ったに違いない。子供の引き取りは、ひとりひとり、一軒一軒の問題であるようにも見えるが、この1847年、48年にあっては、ケベックやモントリオールといった町全体の問題でもあったからである。誰にとっても、語り継がねばならない出来事であったのである。

さいごに

グローセ島は、「大きな島」の意味とは実際には異なるこじんまりした島である。⁽⁷⁾ 筆者は、2007年8月にグローセ島を訪問した。あいにくの雨模様で、8月であるにもかかわらず身震いするような寒さだった。カナダ公園局公認のガイドによる島内ツアーが2種類用意されており、1つは島内の主な旧施設を見て回るもの、もう1つは丘に立つケルト十字と墓地の見学だった。

ケベックからのフェリーに同乗していた10数名の一団が、ケルト十字の前でバグパイプの演奏を行い、花輪をささげていた。彼らはAncient Order of Hibernians⁽⁸⁾という団体であった。雨の中に響き渡るバグパイプの音色を聞いたあと、広大な墓地を見学した。きれいに刈られた緑の芝に立つ無数の白い十字架——どんなに想像力をたくましくしても、当時の惨状、地獄絵図を想像することはできない。墓地の側には、判明している1847年の島内での死亡者5,424人の名前が刻まれたガラスプレートが設置されており、ある名前を指差しながらカメラに収まっている女性の姿があった。160

年も昔のことを知りたい、語り継ぎたいと思う人々の生の姿に接し驚いた。

ツアーの途中で当時の病院を見学した。2段ベッドの脚を固定するためのものだったという四角いくぼみが床に点々と刻まれていた。建物の脇には小さな墓地があり、10にも満たない十字架や墓碑が立っていた。そこは乳幼児の墓地だった。ひとつの墓碑を読むと、「マージョリー・リーナ・ワゴン、1897年9月5日死亡、3歳」とあった。大飢饉の年から半世紀も後のものであるが、目的地にたどりつくことなくこの島で短い生涯を終えた幼い子供のことを思うと、大飢饉がもたらした数知れない不幸、移民や移住の意味をあらためて考えざるをえない。多くの犠牲を払って北米大陸でゼロからのスタートを切ったアイルランド人移民の残したものの、築いたものとは何か。まだ知られていないことがあるに違いない。

【注】

- (1) cf. Marianna O’Gallagher, “The Orphans of Grosse Ile : Canada and the adoption of Irish Famine Orphans, 1847-48,” from *The Meaning of the Famine*, Edited by Patric O’Sullivan (The Irish World Wide History, Heritage, Identity, Volume Six), London, Leicester University Press, 1997, p.93.
- (2) cf. Andre Charbonneau and Andre Sevigny, *1847 Grosse Ile : a Record of Daily Events*, Parks Canada, 2002, pp.19-20.
- (3) cf. “The Orphans,” p.89.
- (4) cf. Marianna O’Gallagher, *Grosse Ile Gateway to Canada 1832-1937*, Quebec, Carraig Books, 1984, pp.117-143.
- (5) Marianna O’Gallagher and Rose Masson Donpierre, *Eyewitness Grosse Isle 1847*, Quebec : Livres Carraig Books, 1995
- (6) cf. Young Immigrants to Canada—Widows and Orphans of 1847, (<http://www.ist.uwaterloo.ca/~marj/genealogy/>)
- (7) 全長約2.5km、幅約0.9 m、ケベックの下流約48kmに位置する。
- (8) 1836年、ニューヨークで設立された団体。アイルランドにルーツを持つカトリック教徒の同窓的な組織で、当初はアメリカ国内のアイルランド移民を援助することを目的として設立された。カナダのモンリオールにも支部があり、毎年グローセ島への巡礼は恒例行事となっている。

【参考文献】

- Bruce S. Elliot, *Irish Migrants in the Canadas : A New Approach*, Montreal, McGill-Queen’s University Press, 1988.
- Donald MacKay, *Flight from Famine*, MacClelland & Stewart Inc., Toronto, 1990.
- Margaret E. Fitzgerald and Joseph A. King, *The Uncounted Irish in Canada and the United States*, Toronto, P. D. MEANY PUBLISHES, 1990.
- Parks Canada, *Grosse Ile and the Irish Memorial, Visitors Guide*, 2002
- 佐藤郁「暗黒の1847年—カナダにおけるアイルランド移民受け入れ」、東洋大学国際地域学部紀要『国際地域学研究』第9号、2006年

* なお本稿は、平成18-19年度、日本学術振興会により補助金交付を受けた共同研究「19世紀における『移民大国』アイルランドと北米大陸の相互関係についての研究」（課題番号18510219）の研究成果の一部である。

Irish Children in Black 1847—Victims of Immigration to Canada

Kaoru SATO

The Great Irish Famine of 1845 to 1850 forced a large amount of Irish people to leave their native country. The destination of these people was usually the U.S., but the poorest were embarked on ships to Canada, which offered cheaper tickets than ones to the U.S. Over 30 thousand children under 14 left Ireland and England for Canada in 1847. Unfortunately about four thousand children died on board or on Grosse Ile. Moreover, children with their widowed mother or children without any parent were admitted to churches and asylums to be taken care of. Many of them were adopted to families or moved to schools with dormitory in Canada. We can say that such children and innocent infants were the victims of the Great Famine and the immigration to Canada.

The purposes of this paper is to overview the conditions and circumstances of emigrant children in 1847, and to consider how the survived children in Canada kept or lost their identity as Irish.